

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	野間宏と梯明秀 : 虚無の自覚と「崩壊感覚」
Author(s)	尾西, 康充
Citation	近代文学試論 , 58 : 29 - 40
Issue Date	2020-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/51594
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051594
Right	
Relation	



野間宏と梯明秀——虚無の自覚と「崩壊感覚」

尾西康充

1

戦時体制下、西田・田辺哲学に魅せられていた知識人学生たちにマルクス主義への道を開いてみせたのが《京都学派左派》と目された経済哲学者・梯明秀であった。「暗い絵」（一九四六年四、八、一〇月）の背景になっている京都帝国大学時代を回想しながら、野間宏は「梯氏の思想は僕ら若い生命の導き手であった。そして僕達は当時、このひとが、生活の困難と闘いながら、ただひとり、僕達の前につけてくれた道を歩いていたのである」と尊敬の念を表している。⁽¹⁾

梯は敗戦後、北支那派遣軍第二軍の第一一五師団砲兵隊の兵士として河南省鄭城で俘虜生活を送っていた。半紙一枚にガラ刷りした俘虜部隊唯一の回覧ニュース紙を通して、戸坂潤と三木清の獄死が知らされた。戸坂は四五年八月九日に長野刑務所で、三木は九月二六日に豊多摩刑務所で、二人とも疥癬が原因で死んだとされている。三木・戸坂・梯は第一高等学校から京都帝大へ進学したという共通点を持ち、梯からみて三木は七学年上、戸坂は四学年上になる。当時の帝大では出身高校別の交遊があり、彼らは「一高哲学会」を通じての親しい間柄で、西田・田辺哲学に傾倒していた日本の思想土壌にマルクス主義を移植す

る役割を果たした思想家たちであった。

梯は「軍隊生活中もマルクス主義の思想の持主として通してきた。もちろん俘虜生活は解体過程の軍隊として思想の自由がみとめられつゝあつたからではあるが」と告白する。⁽²⁾ マルクス主義を棄てなかつたとあえて主張する言葉からは逆に、それへの断念を強いられた転向体験が、梯の無意識の底に消し去りがたい記憶となつて残っていたと推測できる。

一九三八年六月、梯は京都人民戦線事件に際して、雑誌「世界文化」の関係者として治安維持法違反の容疑で検挙される。未決監の獄中で転向し一九四〇年八月、懲役二年（執行猶予四年）の判決を受けた後、同年十一月、国策会社である北支那開発株式会社調査局東京支局に就職する。四二年四月、同社北京本社に転勤し、山西省の陽泉土法炭坑——土法^{どほう}とは現地の旧式工法のこと——などの調査業務をおこなう。しかし戦局が悪化した四五年六月に現地召集され、第一一五師団砲兵隊に配属されたのである。この師団は当時、河南省西部から湖北省北部の地域に攻勢をかけた老河口作戦に参加し、兵力を消耗させていた。梯は河南省で敗戦を迎え、翌四六年四月に上海に移動するまで同地で俘虜生活を送った。

俘虜となった梯が痛感させられたのは、「日本軍隊のいわゆる「班内生活」なるものの低劣さ」であった。「家族を北京に残してきた現地召集の老兵たちは、初年兵として奴隷のごとく酷使され、無秩序なパリズムの下に、そのまま内地に連れてこられた」という。³『回想の戸坂潤』（一九四八年一〇月、三一書房）に収録された「牢獄と軍隊―戦後論壇における二つの空席」には、「班内生活」を「封建制的・奴隷制的で無政府的バーバリズム」が支配する「牢獄」と痛罵している。⁴副題にある「二つの空席」とは、戦後思想界で活躍するはずであった三木と戸坂の獄死を悼んで付せられた言葉であった。

野間は内務班こそが軍隊の本質であると考え、自分の体験にもとづいて「真空地帯」（一九五二年二月）を書きあげたのだが、実は、その発想のヒントとして梯の一文があったのではないか。一三年の歳月をかけて書きあげられた八〇〇〇枚におよぶ大作『青年の環』に登場する哲学者のモデルが梯であったように、⁵難解な文体で知られる野間の文学を理解するには、梯の思想が手がかりになるだろう。

野間によれば、「僕は学生時代から、ずっと、この人の文章が、たといかなるものであろうと、たとえば、京都の『日出新聞』などにのつた、良書推薦のような、ほんの三、四行のようなものであっても、さがし出してきて、むさぼり読んだものである」とする。⁶一九三六年、京都帝大文学部仏文科二年生であった野間は、非合法下に共産党再建を目指した日本共産主義団に関与していた永島孝雄の紹介で、梯のもとを訪れている。梯は「野間宏君も二、三度、ぼくの家に来たそうなんです、その時には、覚えていなかったんですが、だいたい十人ぐらいが、しよっちゅう集って」いたと回想する。⁷

歴史学者・奈良本達也は梯の家で開かれていたフランチ・ボルケナウ研究会の参加者の一人であった。戦後間もない時期に発表された野間の短編小説を読んで、梯とともに本郷にあった野間の家を訪ねている。「学生時代以来、始めてゆつくり話をしたようなことだった。梯さんが盃をなめながら、大いに談論風発するのを、口の重い野間君がしきりにうなずきながら、短い言葉をかえしていたのをかすかに覚えている」という。⁸野間が文京区本郷赤門前の法真寺の一隅に転居したのは一九四七年春であったことから、梯と奈良本が野間を訪問したのは「暗い絵」発表の翌年のことであったと推測できる。梯は「天皇制絶対主義下の人間の自由」を「暗い不潔な穴の形をしたやうな魂」と擬えた「暗い絵」を読んで、「これがあの暗い谷間のインテリゲンチヤの自覚の形か」と思うと「熱い羞恥の感情」を抱かされたという。⁹梯が「羞恥」に堪えながらも転向体験と戦時協力の過去を告白する決意をしたのは、「暗い谷間の明い眼、非転向の実存者たる永島君の獄中からの眼ざしに堪へられなかった」とからだろう。¹⁰

野間によれば、敗戦後の日本社会における虚無感——戦後の新時局における精神的な栄養失調——を自己分析してみせた梯のように、「崩解感覚」（『世界評論』第三卷第一〜三号、一九四八年一〜三月）の執筆を通して、「自分の内部に巣くう空虚の調査」をおこなったという。以下、独自のマルクス主義経済哲学を構想した梯から、野間がどのような影響を受けていたのかを明らかにしたい。

2

梯には生涯を通じて二度の検挙歴がある。最初の検挙は一九三〇年四月のことであった。三・一五事件および四・一六事件を通じて壊滅的打撃を受けた党を再建するために活動していた日本共産党幹部・佐野博に、会合と宿泊を目的に自宅を使わせた容疑であった。このとき戸坂も田中清玄に自宅を提供したとして逮捕されている。大阪島之内警察署における三週間に及ぶ留置場生活で、梯は太い綱で腰を打たれて立ってなくなるまでの拷問を受けた。「生なましい拷問の感性的体験」を通じて、梯は「国家権力の末端における暴力装置が一般国民の社会秩序を支えていることを、初めて直観」させられるとともに、「資本主義社会の生産力として教育されたインテリゲンチヤが、この社会から否定され、一時的なりともその矛盾を体験することは、資本主義社会の矛盾の本質がなんであるかを、把握するための端緒」でありうるとの考えに至った。¹²

私の偶然的に遭遇した被検挙において感得せしめられたところの、当時のファシズム的体制下にあつて日本の国家の統治なるものが、その基底において拷問によって支えられていたことを感性的に体験したこと合理的な説明であり、そのためには、かかる統治形態を非合理的に採用せざるを得なかつた日本の資本主義社会についての一般的な理解が緊急の関心事であつた。¹³

この直後梯は、自分がフランス社会学者であることを抛棄して、「検挙の偶然的体験を歴史的経過の必然性にあるものとして理性的に受けとめる」ことのできるマルクス主義経済哲学者に転じたのである。¹⁴

梯の二度目の検挙は、さきに触れたように一九三八年六月のことで、京都伏見警察署で取り調べを受けた。下鴨署に移されて留置された後、山科刑務所の未決監に勾留される。この後梯は予審判事に転向上申書を提出し、執行猶予付き判決となつて釈放されたのである。日中戦争がはじまつて緊迫したアカデミズムの雰囲気、梯は『社会の起源』再刊序文（一九四九年二月、日本評論社）のなかで、つぎのように回想している。

当時のアカデミーの緊張した雰囲気もさることながら、わたくしの時局的感覚を刺戟してくれたものは、当時わたくしの書齋を訪れてくれた京大の学生群であつた。日華事変を翌年にひかえて国内の政治的圧力は、インテリゲンチヤに自由なる思索を禁圧するかにみえてきた。かれらの歴史の論理は、当時の客体的な唯物論哲学の影響をこゆるものではなかつたにしても、歴史の感覚は、かれらの方が敏感であり、つねに新鮮であつた。しかも、かれらは一層純粹に将来の自己、将来の仕事、将来の学問について、おのがじしん考えをめぐらしていたのである。¹⁵

議論を戦わせた有望な学生たちのなかには、戦場から「未帰還のもの、生死不明のもの、死去の確実なるもの」が出た。敗戦後の日本社会を生きる梯は「淋しい」気持ちに襲われながら「戦時中に喪つた当時の若き友である三君」——哲学専攻の永島・布施・村上尚治（戦死）——を追憶し、「わたくしの目下の自己変革の苦悩において励まし衝き動かしてくれるものも、三君の魂である」とオマージュを捧げた。¹⁶ 彼らは梯

の家に集まってボルケナウ『近代世界観成立史』やヘーゲル『エンチクロペディ』を読んでいた。一九三五年末からは毎週一回、マルクス経済学者・長谷部文雄の家で、高島素之の改造社版『資本論』をテキストに、梯が座長となつた研究会が開かれた。誤訳を指摘し、参加者による研究報告をふまえて討論がおこなわれた。しかし三八年一月、日本共産主義団関係者一斉検挙事件に際して、永島や布施、村上、椋梨実たちが検挙されてしまい、その他の学生も三月に卒業したために、この研究会は解散することになった。¹⁷⁾

「ただ生活のために思想的転向」を表明したとする梯は、「日本ファシズムの植民地侵略の中枢機関」に結びつき、「半官半民の一ファシズム機構の構成分子に転化」したという。¹⁸⁾「どこまでも理性的であろうとした」とはいえ、それは「戦時中の暗い谷間」における「仕方のない正しさ」でしかなかった。それに比べて永島は、「政治的圧力への反抗において、時局の危機を一身に引きうける」。そこに「追ひつめられた限界状況を超越して、本来の自己を現存在に押し立てるといふ根拠からの自由の立場」を獲得した。梯によれば、永島は「かゝる仕方での正しい立場」に徹してその短い生涯を全うしたのであった。¹⁹⁾

単に可能的な歴史的信念と余りにも現実的な絶望との暗い谷間にあつて、虚無に直面し深淵に落下し、光を自ら遮断して衝動に形を見ることができず、この自己矛盾的内部闘争としての苦悩、この堪へざる苦悩に堪へてゐる緊張、戦時下日本のインテリゼンスの唯一可能なこの精神的緊張のほかに、いづこに精神的抵抗の根拠を見出すことができるであらうか。²⁰⁾

永島は「自己矛盾的内部闘争としての苦悩」——「非合理が単に自己の外に対立してゐるのでなく、自己の心の底に超越してをり、この絶對他者を合理化すべき責任を感じる立場」に由来する「実存的苦悩」——を抱えながら獄死した。²¹⁾ 梯は、真の知識人として生きるためには不可欠であつたそれを放棄してしまつたことを「羞恥」するのであつた。つぎに梯の「虚無と実存の超克に関する第一章―精神のこの病―」（『理論』第七号、一九四八年二月）を取りあげながら、梯の視点から戦後日本の精神風景を展望してみよう。

3

一九四六年五月五日、山口県の仙崎港に復員し、廃墟と化した日本社会で新たな生活をはじめた梯は、自分でもその原因がよく分からない虚無感にとらわれる。「虚無と実存の超克に関する第一章」は、その心境を吐露しながら自己診断し、恢復に向けた処方箋をまとめた診察記録であつた。

まずは「過去からの断絶」である。「ファシシヨ的弾圧」の下でマルクス主義を活かそうとする際、つねに苦悩がつきまとつた。しかし戦後になって、GHQの下でマルクス主義に「政治的自由」「法律的自由」が保証されると、「その表現になんの苦悩があるであろう」とする。梯によれば、人間の精神活動には、外部の現実には圧迫されてはじめて内部に抵抗が生まれるものであつて、外部からの圧力がなくなると内部の活動が消失してしまうという矛盾が生じるというのである。ただしこ

の場合、外部の現実とは、単に知覚的な現象を指すのではなく、さまざまに社会的現象の背後にあつてそれらを生起させている動力源——梯は「時局的一般者」「超越的一般者」と呼ぶ——を意味している。

われわれの身体を内部から衝き動かすものは、外部に知覚されるものの今ひとつ奥にあるものである。外部知覚的な社会諸関係を超えた時局的一般者がわれわれの生活を外から現実限定してくるとともに、直接的に内から衝動的に身体を衝き動して実践に駆りたてる。われわれを實踐に、現実の生活のなかに駆りたてるものは時局的一般者としての時局的精神である。²²⁾

ここで梯は《『資本論』を論理学として読む》という《レーニンの課題》に沿つて、ヘーゲルの論理学を応用している。ヘーゲルの「他者のなかにありながら、ただ自己とのみ同一なものであるとき、はじめて主体が自由になる」という弁証法を、「内に見た衝動的自己は外の時局的な一般者である。外部知覚的な時局的実体が内部知覚的に衝動と把握されるかぎり時局的精神となる」と解釈しているのである。²³⁾

梯はこのような弁証法の論理を使って「時局的一般者」「超越的一般者」や、「心の底に見てあても触るべからざる絶対の他者」である「革命的底流」といった概念をみずからの哲学のなかに組み込んでいたのであるが、ヘーゲルの弁証法は基本的に、自己否定のモーメントを孕みながらも、(理性的であるものこそ現実的であり、現実的であるものこそ理性的である) (『法哲学』) という「マルクスが批判したことく自己肯定的な精神」であつた。²⁶⁾ すなわちそれは、戦時体制下の日本の

知識人にとって唯一可能であつた「精神的抵抗の根拠」としての「実存的苦悩」——梯が「暗い谷間の実存的理性こそは、まさに継承すべき戦争の精神的遺産である」と評価したもの——とは異質のものであつた。²⁷⁾

つぎに「時局からの断絶」である。梯によれば、自己の内面にある「空虚」は、「戦後時局の固有の現象としての廢墟と荒廢」を外部に知覚しながらも、そこから「時局精神」を感受することができなかったことによる。²⁸⁾ 敗戦後の論壇をみわたせば、マルクス主義は「旧著再刊のままに、講談風的な解説のままに」受け入れられ、出版界には「戦前期の勢力配置そのものの「再刊」現象」が生じている。²⁹⁾ しかしこれらは梯に虚無感を抱かせるものばかりであつた。梯は「戦争期間中ファシズムの抑圧に精神的に抗して苦悩に堪えつづけたいンテリゲンチヤの必ずいしたことを信じて疑わなかつた」とし、「その苦悩としての思想、文化が、如何なる形態であらわれてくるかに期待」していたとする。³⁰⁾

なぜなら、これこそがわたくし個人の空虚なる精神を静かに涙をもつて潤おしてくれるものであり、民族の空白を充填する最初のものであらうと信じていたからであつた。³¹⁾

ファシズムによつて弾圧された戦前の思想を、何の葛藤もなくそのまま復活させる「再刊」現象³²⁾では、精神の空白は埋められるはずがない。軍事的侵略と思想弾圧という国内外で犯した共同体レベルの罪責を白日の下に晒すだけでなく、国家が掲げた誇大な理念に自我理想を重ねていた個人レベルの誤つた自己同一化を停止することからはじ

めるべきではなかったのか。そのうえで戦争や投獄によって犠牲になつた人びとへの悲哀と悼みを共有する必要があつたのではないか。それらがおこなわれなかつたのは、「国家変革の過程が、敗戦後においても、民族の自力によつて遂行されたものでないという事実」があつたからである。³² さらにいえば、東西冷戦下に、共同体が資本主義陣営のメンバーの一員として迎えられ、経済復興の成功による大量消費社会の享樂者という役柄に個人が自己同一化したおかげで、目まぐるしく進展する経済復興の現在に人びとの眼が奪われていたからであろう。

戦後ドイツにおいても、目を見張るほどの経済復興に比べて、民主主義的な国家の構築は、戦勝国による「お恵みの欽定」の範囲内ではないとされなかつたとされる。³³ アレクサンダー・マルガレーテ・ミツチャーリツヒによれば、ドイツ国民の間では「罪責、恥辱および失われたものへの悲哀に対する防衛」——否認・抑圧・非現実化といった心的防衛機制——が強く働き、個人的および共同体的人格の成熟をうながすために必要な段階——フロイトが《想起・反復・徹底操作》と説明した——がスキップされてしまつた。³⁴ その結果、「国家の一大破局のあとでの悲哀トラウマ、レクタクチオンの欠落」という事態を招き、「われわれの社会の自我の空虚化」——「これは自我が、現実の社会の多様な断面やさまざまな現実で、創造的な統合的役割を果たせないような弱さをもっている」ことを意味する——が現れることになつたのである。³⁵

悲哀を感じるといふことは、ある喪失を、苦痛をともなう回想作業によつて徐々に耐え、解決することを学ぶ精神的プロセスである。それを回避して、新しい目的や新しい同一化の対象への乗り換えがおこなわれると、人格の成熟化がおこなわれず過去の非現実化がおこる。日本も

ドイツも、戦後復興への集団的熱狂は、「一種の作業療法」とも呼べるものであつたが、その裏面では過去の否認と抑圧が不可欠になつてゐた。³⁶ 日独ともに、戦時体制下で犠牲者になつた人びと——梯や野間が強く意識したのは知識人学生であつた——への贖罪と償いが十分とはいへなかつたのである。

4

梯は、戦後の論壇に「空白期間以前の論調の丸出しが支配的でなかつたか」という批判を加える一方、「文壇にはこの民族の精神的空白を充填するための衝動的な動向もあるかのごとくであつた」と指摘した。³⁸ 戦時体制下の「精神的空白」を「充填」しようとするモチーフに貫かれた「暗い絵」——「崩解感覚」は、「暗い谷間」を生きていた知識人の体内に「あんな暗い不潔な穴の形をしたやうな魂」——一つの大きな奇妙な穴のようなもの——があつたのを省察——羞恥——するところから戦後主体を出発させていたといえよう。野間は「崩解感覚」創作に際して、梯から受けた思想的影響をつぎのように説明している。

その『崩解感覚』で、僕は、その主人公が、自分というものを、単に、内部知覚的なものとして考えているところに、戦後の虚脱感覚の見本のようなものを描き出そうとしたのであるが、僕は梯氏のこの「精神のこの病」のなかで、そのような戦後感覚の論理構造の分析をはじめて見出すことができたのである。そして、梯氏が自分の精神的失調を自覚して、この自分の空虚な自己意識のこの「物理的断層を判

然と自覚した上は、この断層への精神分析的な反省が、わたくし自身で積極的にやるほかない主体的な課題として心に迫ってくる」として、この空虚な自分、虚脱された精神そのものを自分の理論的生活の出发点と考えて、その論理的構造の追求をはたされたと同じように、僕もまた『崩解感覚』において、自分の内部に巣くう空虚の調査がはたしえたとすれば、これは全く僕が梯氏から長い間かかって学びとることのできた、主体的な生き方考え方が、戦争の暴力にあつても、切りとられず、僕のなかに、かなりあやまりなく、そだったことを証明しているのであるといつてよいのではないだろうか。³⁹

では、野間はどのようにして「自分の内部に巣くう空虚の調査」をおこなったのか、その具体的な内容を「崩解感覚」において検証してみよう。

及川隆一は大学の研究室の助手を務めている。その研究室は「全く調子の低い、講師や助教授や講座の席を根気よく待っている助手達が、取繕うた礼節と尊敬とをもって一人の学問的にも老いた主任教授を取りかこんでいる」という雰囲気であった。象牙の塔の住人たちは、戦後社会の急激な変化とは無縁であるかのように、私的制裁の暴力に満ちた軍隊生活を経ってきた及川にとって、彼らの談じる高尚な哲理は空疎なものに感じられたのである。研究室内の彼のポジションは「彼が戦争にいつている間に後輩にまで追越されてしまっていて現在では非常に低いものである」のだった。

常盤館という同じ下宿で、出身大学の後輩に当たる大学生の荒井幸夫が縊死したのを耳にしたとき、及川は「烈しい衝動が自分の身体の深

みからつき上げてくるのを隠さねばならなかった」。その場面はつぎのように描写されている。

というのは、以前戦場で彼が自殺をはかったときの、あの不気味なけものように自分の背後から自分においせまったものが、いままた自分の身近に再び近づいて来るかのように感じたのである。そして彼は、左手の根元から指の飛び去った醜い傷跡がズボンのポケットのなかで肉の根を引きつけるかのようにおののくのを感じた。

目に見えないものが背後から迫ってくる。もはや感じられないはずの、失われた指の感覚がよみがえって自我をつかまえる。本来、『有』を前提にして『無』がとらえられるにもかかわらず、及川の場合、『非在』によつてしか『存在』がたしかめられないという自己認識の矛盾構造がみられる。及川の左手の中指と薬指は、彼が「天門の第一機関銃中隊」に配属されていたとき、自殺に使った旧式手榴弾の破片によつて根元からもぎとられたとされる。「天門」とは、一九三五年八月に陸軍第四師団歩兵第三七連隊の連隊本部が設営された都市で、湖北省武漢から西へ約七〇キロメートルの場所に位置する。歩兵第三七連隊は、野間が四二年一月に臨時召集されて入営した部隊であった。野間が配属されたときには、フィリピン南方作戦への転戦のために江蘇省宝山区江湾に向けて移動していた。

「太い白い舌の先」が口からつき出た荒井の死体を目撃した及川は、自分が死んではいないと同時にかつてのようには生きていないことに気づく。死への衝動——かつて自殺を企てた瞬間の「ほの暗い頭の奥や

胸や腹や腸やその辺りに拡がっている眩暈めまいのような感覚」が反復強迫してくるのであった。

ぐにやりとした、肉のくずれ去る感覚、そして背骨の中を走る神経の束がぐしやりと引きちぎれて、自分の周囲に存在している外的世界や自分の内部に自分を形づくっている内的世界が形を失って行くような崩解感覚。

「軍隊生活の醜悪な圧迫と苦痛」から逃れようと自殺を図るのは、「哀れな弱者の考え」でしかないと考える及川は、自殺未遂の記憶を抑圧している。しかし荒井の縊死体を目撃した途端、そのときの感覚がよみがえってきたのである。及川には荒井の自殺の原因が分からない。「人間は、結局、その深い根底から、自分以外の他の人間を理解することなど不可能である」とさえ思われるからだ。荒井の首に巻き付いた麻紐の結び目は、軍隊生活を送った者でなければ作ることでできないものであったことや、荒井が「自分」という言葉を一人称呼称として使ったことなどから、及川は彼が兵役に就いていた過去を推測する。及川の周囲では最近、二〇代の若者が三人自殺している。山下実氏は「(戦争)が直接彼らを殺すのではない。戦後の精神的思想的な、さらにはいえば実存主義的な苦悩によって、彼等は自ら死を選択したのだらう」と指摘している。¹⁰⁾

荒井は生前、「ゾルレン的にみて、自分というものを賭けなければ、二律背反の世界には絶対に達しないと僕は思うのです」と語っていた。桂秀実氏によれば、荒井の死体には「生きている存在に当為(ゾルレン)

を強いてくる「死者」としての「超越的一般者」の役割が託されてお
り、野間における「「死者」の形而上学」がそこにみられるという。¹¹⁾ 及川は、荒井の「純粹な哲理の問題」が「一体、いつ、何によって、ばらばらに解体し、くずれ去ったというのだろうか」と思うのと同時に、彼の言葉を聞いて「自分の学生時代の一時期」を思い出し、「羞恥しゅうちを感じてうなずくように聞いていた」。なぜなら及川が「学問や思想に対する熱情を失ってしまった」こと以上に、「学問や思想は、何一つ自分を(自分の生命を)生かしはしないという風」に考えられたからであった。(あるべき人間像)を説く高尚な哲理はもはや何の意味を持たず、「もはや自分の人生を新しく切り開くことができない」という心境におちいつていたのである。

戸坂は代表的著作『増補版日本イデオロギー論』(一九三六年五月、白楊社)のなかで「人間は個人であると共に個人的存在を超越した共同体的人間存在なのだ。だから個人にとつては、ここから所謂道徳上のゾルレンも発生するのだ」と論究している。¹²⁾ 個人の道徳と共同体の道徳の二律背反、すなわち国家や民族のために軍隊の規律に従って戦死も厭わないとする共同体の道徳と、あくまでも自己保存の欲求——野間の場合は強度の性欲に象徴される——に従って生きる個人の道徳とのアンチノミーがそこにみられる。横柄な態度をとる下宿の主人は無神経にも「及川さんも、指を二本までお国にささげなすって、ふーん、誠にお気の毒な」という。及川は、荒井や下宿の主人の言葉を聞いて、国家のためには犠牲を厭わないとする(あるべき人間像)を個人の無意識に潜ませる共同体の《法》の圧力を感じざるを得なかったのである。

その一方、及川は下宿の寢床に入ってから「蒲団に接触している重苦

しい自分の皮膚の中に、自分という一個のものが、ただ一個だけ、すべてのもの……友や、人々や、下宿の主婦やからはなれて、……つめられているというようなこと」を感じるようになった。まるで「腸詰」のような、ただし「俺以外の誰一人も、この腸詰の内の詰物がなんであるかを知ることとは出来はしない」。存在が「わたし」そのものにびったりと粘着した即自 (an sich) —— 「腸詰」の比喩にみられるようにまったく身動きのできない状態、すなわち「あるところのものである」と同時に「あらぬところのものではあらぬ」存在——が示されている。存在が主体となつてその状態から脱するには「存在の穴」、すなわち「わたしであらぬわたし」としての他者を欲望するのである。

5

下宿の主婦が警察にとどけてくる間、及川は死体のそばで待つことになった。約束の時間から一時間以上遅れて待ち合わせ場所の飯田橋のガード下に到着するが、西原志津子の姿はみえなかった。「彼の身体の上にあの手榴弾の爆発した瞬間の、ぐにやりとした感覚、意識と体液とが混合したようなねばねばした瞬間」が回帰し、「ぬらぬらした自己の崩解感」にとらわれてしまう。

志津子とは肉体的な関係のみによつて結ばれている。指を失つたのは機関銃の操作を誤つたからだと説明する及川に、彼女は「たくみに眉をひそめて、いたみの表情をつくつて」みせて同情している振りをする。彼女の兄も応召して出征したが帰還しなかつたとされる。

しかしながら、あるいはむしろ、彼のそのような指の形が、彼女の心を把えたとさえ言えないこともないのであった。というのは、その後、二人の関係が結ばれたとき、彼女は彼に左手を出させてみせた。そしてしばらく気味悪げにそれをみつめ、その皺のよつた傷跡に自分の唇を置くのだった。

及川は「彼女の柔かい唇が、その傷跡に走る神経をくすぐるとき自分の全身をゆすぶる苦しみのために、ふるえるのだった」。失われた指が志津子の心をとらえ、失われた指の跡に彼女がキスすることによつて及川は快感にひたる。失われた身体の一部を通して他者と結ばれ、他者の欲望を引き受けることよつて自己の存在を認識しているのである。

飯田橋から独りで歩いていた及川が「赤煉瓦の土台石」に目をやるのと、「大きな奇妙な穴」が体内に開く。「その大きな空洞には、細い奥深い肉の襞膜が無数にあつて、それがいまは全く乾ききつて湿気の当たるのを待つている」とされる。穴は充たしてもらい、ふさいでもらうことを求める。彼の「乾燥した襞膜」を濡らし、その内部を充たすのは「黒系の紅」を唇にさした志津子の肉体であるとされる。人間は自由であるがゆえに欲望を持つ。欲望とは自分に不足しているもの、すなわち欠如を抱え込むことであつて、それを埋めようとして他者との関係を生じさせる。欠如とは穴——無——であり、それによつて人間は「それ自体においてあるのではないもの」、自己を脱して存在を意識するものとして実存するようになる。サルトルによれば、「存在のふところに、存在の一つの穴として、存在する」のが対自 (für sich) であつて、「わたし」がそれであらぬところのもの」という否定のモーメントを通じて

「わたしそれであるべきであるところのもの」を告げ知らせるとい
う。⁸

「わたし」は他者のまなざしに映った自分の姿を、他者のまなざしの
もとで眺めて、そこに自分の像を発見する。荒井の口からはみ出た「舌」
をみた及川は、口舌の徒であった生前の荒井の姿を想起すると同時に、
彼の「舌」に自分がみられていることを意識することによって、荒井の
姿のなかに舌をふるって議論を戦わせた学生時代の「わたし」を呼び覚
ました。それは及川の無意識に抑圧されていた記憶であった。だがもは
やその「わたし」に戻って生きることができない。なぜなら彼には、心
的外傷体験となった軍隊生活の記憶が回帰し、苦痛を引き起こすから
である。

及川の脳裡にフラッシュバックするのは、「天門の駐屯兵舎ちゅうとんへいしやの中廊
下のくらい土間に編上靴をはいたまま膝をそろえて坐らされている自
分自身の姿」であった。及川は小銃の発条を手入中に傷つけたために
「私刑リンチ」を受けて、「班内の銃架にかけた小銃の前で五時間余り不動の
姿勢をとり、大声で「三八式歩兵銃殿」を百回」も繰り返させられたの
である。帝国陸軍では菊花紋章の刻印された歩兵銃は、天皇からの預か
り物とされていた。この他にも、銃口蓋を盗んだとか、行軍中に喀血し
たという「偽りの申立て」をしたとかの疑いをかけられた記憶がよみが
えってくる。毎晩眠りに入る前にいつも閉じた瞼の裡に現れ、「彼の心
と身体を焼きつくすこのいやな過去の自分の影像」に向かつて「可哀そ
うにな、ほんとに俺という奴は哀れな人間だな……ヘーゲルの論理学
に於けるヴェルデンの意識についてか……ふん、そして、嘘について、
戦友のものを取って、ただ、上等兵に殴られるのを恐怖して……そし

て、とうとう山猫のように穴の奥においつめられて……」と心のなかで
つぶやく。追いつめられた自分が忘却しようとするもの——手
榴弾を握ってうずくまっている姿や、兵隊たちによってかつぎ上げら
れた血まみれの姿、兵役忌避のために指を落としたのではないかと取
り調べを受けている姿、奥地の勤務に転属を命じられた姿——が忘却
を突き破って意識されてくる。

及川は「何という奴だろうな、俺という人間は、ゾルレン的にみて」
と繰り返す。彼が苦しんでいるのは、指を失ったという身体的な傷のた
めではなく、「人タルモノ固ヨリ心力ヲ尽シ国ニ報セサル可カラス」
（「徴兵告諭」）と謳われた帝国陸軍の「あるべき兵士像」から逸脱し
てしまったという心的外傷のためであった。現在の彼の心的構造は、国
家や軍隊の《法》、すなわち《大文字の他者》に圧迫されて強迫神経症
の症状を呈しているのである。

ヘーゲルの論理学では、自己は他者と関係を持ち、他者のうちに自己
と同一であるところに自由な主体が生成（werden）する。そして人間が
真に人間的、すなわち個体的な存在となるのは、人間が国家に承認され
た公民として生き、行動する限りのこととされる。だがアレクサンド
ル・コジエーヴによれば、個性があますところなく実現され、承認へ
の欲望が完全に充足されるのは、「普遍的で等質な国家」が成立したう
えでのことである。なぜなら、そのような国家では「階級や民族等の「特
殊な差異」（Besonderheiten）は「廃棄」され、国家そのものも「定義
上人類全体を包含」するようになるからであるという。⁴⁴

この作品のなかには《赤》が頻出する。荒井の舌、志津子の口紅、赤
レンガはすでに指摘したが、他にも荒井の所持品であった書物、赤い皮

革のシミがついた靴下など、及川に「焦燥感と虚無感」を抱かせるものであった。そして彼は志津子に合う日はいつも「焦燥感と虚無感」に襲われていた。精神病理学では、「すべての症例において一過性に身体表象の異常が存在することは、強迫症状が身体の崩壊感覚に対する防衛として出現した可能性がある」とされる。⁴⁵ 及川の症状に対する療法は、彼の自我を抑圧している《法》を書き換えることである。自分が「哀れな弱者の考え」しか持っていないからではなく、個人の精神と身体を極度に圧迫していた軍隊組織そのものが原因で自分が自殺に追い込まれたのだと記憶を操作することが求められるのである。

荒井は縊死し、志津子は現れない。及川は切迫的かつ侵襲的に「私は生きているのか、死んでいるのか」という問いを繰り返し続けるのであった。⁴⁶ このような問いを立てることこそ、梯が「空虚な自分、虚脱された精神そのものを自分の理論的生活の出発点と考えて、その論理的構造の追求」をおこなったことに影響を受けて、野間が「自分の内部に巣くう空虚の調査」を進めた到達点であった。

注 「崩壊感覚」の本文は『野間宏全集』第一巻（一九六九年一〇月、筑摩書房）に拠った。

- (1) 野間宏「戦後感覚の論理―『虚無と実存の超克』をよんで」（『理論』第八号、一九四九年四月）、引用は『野間宏作品集』第一〇巻、一九八七年二月、岩波書店、一四三頁）からおこなった。

- (2) 梯明秀「虚無と実存の超克に関する第一章―精神のこの病―」（『理論』第七号、一九四八年一二月、一一五頁）

- (3) 梯明秀『全自然史的過程の思想―私の哲学的自伝における若干の断章』（一九八〇年九月、創樹社、九〜一〇頁）

- (4) 同右、一〇頁。

- (5) 浅田彰・柄谷行人「久野収氏に聞く―京都学派と三〇年代の思想」（『批評空間』II-4、一九九五年一月、太田出版、一〇頁）

- (6) 前掲（1）、一四三頁。

- (7) 前掲（3）、三〇七頁。

- (8) 奈良本達也『師あり友あり―奈良本達也選集第一巻』（一九八一年一月、思文閣出版、一四三〜一四四頁）

- (9) 梯明秀「告白の書―時局の精神的断層」（『展望』第四一号、一九四九年五月、一七頁）

- (10) 同右、二七頁。

- (11) 前掲（3）、三六八、七四頁。

- (12) 梯明秀『物質の哲学的概念』「初版序文」（一九三四年二月、政経書院、引用は『物質の哲学的概念』（一九五六年一〇月、青木書店、一七頁）からおこなった。

- (13) 前掲（3）、三八二頁。

- (14) 前掲（3）、三六九頁。

- (15) 梯明秀『社会の起源』再刊序文（一九四九年二月、日本評論社、一二頁）

- (16) 前掲（9）、一四頁。

- (17) 長谷部文雄『資本論隨筆』（一九五六年七月、青木書店、一六八〜一六九頁）

- (18) 前掲（9）、一三頁。

- (19) 同右、一九頁。

- (20) 同右
- (21) 同右
- (22) 前掲(9)、九〜一〇頁。
- (23) ヘーゲル『大論理学』下巻(武市健人訳、一九六一年三月、岩波書店、一二頁)
- (24) 前掲(2)、一一八頁。
- (25) 前掲(9)、八頁。
- (26) 前掲(9)、一八頁。
- (27) 前掲(9)、三〇頁。
- (28) 前掲(2)、一二五頁。
- (29) 前掲(3)、一七頁。
- (30) 前掲(2)、一二九頁。
- (31) 同右
- (32) 前掲(3)、一七頁。
- (33) A. & M. ミッチャーリッヒ『喪われた悲哀―フアジズムの精神構造』(林峻一郎他訳、河出書房新社、一九頁)
- (34) 同右、九頁。
- (35) 同右、二〇頁。
- (36) 同右、二七頁。
- (37) マルガレーテ・ミッチャーリッヒ『過去を抹殺する社会―ナチズムの深層心理』(山下公子訳、一九八九年七月、新曜社、二二三頁)
- (38) 前掲(2)、一二八頁。
- (39) 前掲(2)、一四八〜一四九頁。
- (40) 山下実『野間宏論―欠如のステイグマ』(一九九四年七月、彩流社、一四

八頁)

- (41) 桂秀実「「死者」の形而上学―梯明秀と戦後文学の理念」(『文藝』第二四巻第七号、一九八五年七月、河出書房新社、一四八頁)
- (42) 戸坂潤『増補版日本イデオロギー論』(一九三六年五月、白楊社)、引用は『日本イデオロギー論』(一九七七年九月、岩波文庫、一六二頁)からおこなった。
- (43) サルトル『存在と無』第三分冊、引用は『サルトル全集』第二〇巻、松浪信三郎訳、一九六〇年八月、人文書院、四一〇頁)からおこなった。
- (44) アレクサンドル・コジュエーヴ『ヘーゲル読解入門―『精神現象学』を読む』(上妻精他訳、一九八七年一〇月、国文社、三二〇〜三二二頁)
- (45) 井上靖裕「精神分裂病の経過中に出現した強迫現象についての精神病理学的考察」(『神戸大学医学部紀要』第五一卷第九号、一九九〇年三月、六七頁)
- (46) ブルース・フィンク『ラカン派精神分析入門―理論と技法』(中西之信他訳、誠信書房、一八四頁)、同書によれば、ヒステリー者にとっては、「私は男か? 女か?」の問いが厳しく現前するのに対し、強迫神経症者にとって「私は死んでいるのか、生きているのか」という問いがより切迫的で侵襲的であるという。ここには神経症の異なる症候が示されている。

(おにし やすみつ、三重大学人文学部教授)